

ルが起きたが、話し合いによって大問題にはならなかった。

昭和二十三年六月二十七日朝、二〇〇〇人を乗せた信濃丸は舞鶴港に近づいた。「陸が見える、おお日本だ、舞鶴だ」目は喜びに輝いていた。紺碧の海に浮かぶ島影や深緑の山並みが刻一刻と鮮明になり、岩壁の岩肌がよく見えてきた。屋根が、白壁が、はっきり見える。

荒涼とした大陸で、ただひたすらに生きることのみに明け暮れた私たちには、目の平穩な眺めはまさに夢の楽園のように見えた。目頭が熱くなった。

私も我もと甲板に上り、「祖国に帰ったのだ、万歳、万歳」と喜んだ。投錨と共に船脇に着き、先に患者が運ばれ、上陸した。検疫をすませ、入浴後衣類の支給があった。診察やら予防接種と諸調査、帰国の手続きに二泊三日間、八〇〇円の支給、毛布と元軍隊の夏服、下着が渡された。忘れもしない第一夜、お湯もたっぶりの浴槽に入り入浴を楽しんだ。何年ぶりの命の洗濯であった。

万斛の涙をのみ望郷の望みを果たせず、命をなくし、シベリアに眠る抑留者の御冥福をお祈りし、御魂に謹んで哀悼の意を表し、御遺族の方々から御同情申し上げる次第である。

私の抑留記

岡山県 妹尾 正一郎

私は、昭和十六年三月に笠岡商業学校を卒業して、三月二十九日に家を発ち、一路下関へと向かった。門司を昼出ると言いに八幡の藤沢さんの所へ行った。

昼出港のウスリイ丸に乗り、まる二昼夜で大連に着いた。途中、仁川沖で嵐に遭い、船がひっくりかえりそうになった。それも漸く収まり大連に着いた。それから二、三日大連にいた。雪が降っており、大変寒く感じた。

その後撫順に行き、満鉄撫順炭鉱に入社し、製鉄工場に配属された。製鉄工場では事務屋なので、いつも

書類を置いて算盤で仕事をしていた。青年学校へ行き、訓練させられた。昭和十九年一月徴兵検査があり、甲種合格であった。昭和十九年十一月一日、阜新の部隊へ入隊することになった。それから半年の間鍛えられた。幹部候補生として鍛えられ、私は乙種幹部候補生として採用された。後から聞いた話だが、甲種幹部候補生になった者は新京で戦闘をして苦労したと聞いている。私は討伐に行き、そこで終戦になった。

八月十七日、貨車に乗り遼陽へ着いた。そこに一週間ほどいた。武装解除は遼陽であった。連隊旗も奉焼して、一週間後、海城に着いた。ここで捕虜編成がなされ、一〇〇〇人（入ソ後五〇〇〇人が加わった）で第五大隊となった。

そのころは、みんな帰国できるものと信じていた。奉天（遼陽）、韓国經由で内地に帰るうわさが盛んであった。十月五日海城を出発して一路北へ、北へと進んだ。

奉天を通過し、ハルビンに到着した。ここで下車し、四キロほど歩いて、入浴と衣服の滅菌をした。

（帰国のためだと言ったが、実は入ソのためであった）。ハルビンで一週間ほど列車の中で生活をした。この間に、ハルビンからシベリア鉄道のカリムスカヤまで線路幅を広げた（同じ広軌でも満鉄は一・四三五メートル、シベリア鉄道は、一・五二四メートルである）列車は十月二十日頃、大興安嶺の山越えであった。澄みきった秋空の月の光が、私たちの顔を青白く照らし出していたのをはつきりと覚えていいる。

列車は山の端を静かに進み感無量であった。ソ連の指揮官は、カリムスカヤからウラジオストクへ行く方が鉄道が空いているから速いと言った。今までの言動から信用できなかったが、帰国したい一念から一縷の望みを託していた。カリムスカヤに着いたのは夜であった。列車よ、東に走ってくれ、東に行けば帰国できるかもしれない、夜のシベリア鉄道を走りながら額を床につけ、神に祈った。列車は西へ西へと走り続け、十月二十四日の夜、列車の着いた所がチタ州ヤブロンワヤであった。夜が明けて十月二十五日、一面雪が降って真っ白であった。ソ連における捕虜は、内務

省の管轄する一般収容所と、赤軍の管轄する労働大隊である。私たちは赤軍管轄下の第五一八大隊に編入される。ヤプロノワヤで各隊、各方面に分かれて行った。私たちも二個中隊二〇〇人が最初の収容所ゲネラルパーティに向かった。そのころは個人の私物も沢山あり、中隊の食糧なども持っていて、人里離れた雪山の山道を重い荷物を背負い、二時間も歩いてやっと現地に辿り着いた。

そこで柵（三メートルくらい丸太の先を鉛筆のように尖らせ、びっしり詰めて並べた柵）の中に追い込まれた。柵内は切り捨てられた落葉松の枝ばかりで、まだ収容所も建てられていなかった。ここが今から住む収容所かと驚いた。その後は毎晩雪の降る中での野宿で、焚き火をしながら夜を明かし、苦しい毎日であった。やがて収容所造りが始まった。柱を建てる所に穴を掘り（穴を掘るのが大変である。土地が凍っているので二時間くらい焚き火しても十センチしか掘れない）、掘ったところに柱を建て、後は校倉造りのように丸太を積み重ね、丸太と丸太の間に苔を並べるだ

けである。屋根にはつつじの枝を並べ、その上に馬糞を十センチくらい乗せた。馬糞は暖かくてよいが、夏になって雨が降ると寝ていても黄色いしずくが落ちてきて、まいった。一カ月作業してやっと二段式の宿舎ができた。ゆっくり休めるかと思ったが、翌日には私たちのような若くて体の強い者一〇〇人は一山越した別の所へ移動させられた。今まで一生懸命造った収容所は第五一八大隊の病院になるのだと言っていた。残留者が病院の勤務者となり、軍医の補助を務めたことだった。昭和二十年十一月二十五日のことであつた。

移動した所の地名は忘れたが、腐った谷という意味でよい感じではない。馬小屋を改造し、床のかわりに丸太を並べて宿舎にした。ただ、柵がないので捕虜気分はしなかった。しかし夜になると宿舎の近くまで狼が出没するので、便所も宿舎から遠くへ行くことは禁止された（便所などはもちろんなく、野糞であった）。宿舎の中で焚き火をして暖をとったが、悲しいかな、宿舎自体が馬小屋であつたから、なかなか暖まらな

い。寒さと睡眠不足が重なって、みんなますます体力を消耗していった。

ここで初めて捕虜としての伐採作業が始まった。二人が一組となって、タポール（斧）とピラー（鋸）を持ち、午前八時から午後五時まで規定の時間働いた。

主に落葉松の直径四十センチくらいのもものが多く、この木を根倒しして枝をはらい、幹を二メートルの長さになり切り一カ所に集め、最後に枝を処理して終わる（枝の処理は雪のあるときは焼却、ないときは山のように積んでおく）。これが伐採作業である。木が太い赤松（鋸が短いので切りにくい）や白樺（枝が多く仕事はかどらない）の山に入ると大変である。何しろ不慣れで鋸の切れが悪かったため、思うように仕事はできなかつた。

三日間が終わったとき、今まで切ったものを一カ所に集めたら、やっと八立方メートル、これが二人一日の作業量（ノルマ）と聞かされ啞然とした。翌日から夜明け前に起こされて作業を始めた。暗くなるまで働かされた。夜中に作業（実際には根倒しは危険でで

きない）をして、朝帰ることも度々あった。もちろんその日は夕食抜きであった。着替えもしないので、作業が終わって宿舎に帰れば、着の身着のまま横になって寝るだけであった。

窮すれば通ずというのか、こんな日が続いたある日、「切れない鋸でいくら頑張ってもソ連の言うノルマは完遂できない。よく切れる鋸で仕事をするのだ」と言う者がいた。そのとおりである。それではどうしたらよいか。「そのためには、鋸の目立てのできる人を宿舎に残しておき、昼は寝て、みんなが仕事から帰って寝ているとき目立てをし、翌日はその鋸で作業をする、そうすれば作業能率も上がり、検収員を喜ばすこともできる」なるほど、いい考えだ。だが、ソ連側との交渉が問題であった。中隊長は毅然として交渉に当たった。交渉は案外すらすらと成立した。作業能率も非常によくなり、我々を喜ばしたのは「ヤボンスキー（日本人）は頭がいいぞ」という言葉だった。それでも伐採作業はきつくと、食糧事情もよくなかつた。作業の帰りは遅くなり、宿舎にももちろん電灯も

ないので、明るさと暖をとるために白樺の皮を燃した
が、油煙で顔も衣服も真っ黒になった。だんだんと栄
養失調で瘦せ衰えていった。顔のむくんでくる者も増
えてきた。特に伐採は重労働で、栄養失調のため死亡
する者も多かった。老衰で死亡するようであつた。死
亡者は火葬にし（山の中であるから、材木が沢
山あるので簡単であつた）、死亡年月日、住所、氏名
などを書いてお互いに知人が持っていた。何度かの装
具検査にも、紙片を口の中に入れて隠したり、服の中
に縫い込んだりしていたが、最後にモグゾンでの装具
検査で遺骨と共に取り上げられ、誠に残念であつた。
ソ連の習慣や実情を知っておかなければいけないこと
を身をもって体験した。

伐採作業も一応終わり、次は自動車積み込みと橋^{きょう}作
業に分かれた。私は馬橋で自動車積み込みの現場まで
材木を運んだ。昼も近く、人も馬も空腹と疲労で気が
立っていた。ノーノー（馬を追う声）と言つても馬は
動く気配さえない。ついに怒つて近くにあつた木ぎれ
で馬の尻を殴打した。これがいけなかつた。自動小銃

を持つた歩哨がつかつかと来たと思ふと、持っていた
むちで私の背中を思いきり殴つて咆哮した。私は失神
してその場に倒れたが、ややあつて同僚から「馬も人
間も同じだ。馬をたたく奴はたたかれる」と怒鳴つた
のだと聞いた。

昭和二十一年五月十五日、サハリンに移動した。こ
こは最初から入山していた部隊がいた。私の捕虜生活
二年九カ月のうち最も長く、最も苦しい所であつた。
サハリンの生活で骨身にこたえたのは、過酷な労働、
粗悪な食事による飢餓、そして厳しい寒さであつた。
入ソが前年の十月であつたから、野山はもちろん銀世
界であつた。

シベリアの雪は多くはない。九月頃から降るがこの
雪は消えて、冬中残るのは十月の雪である。積雪は年
間を通じて一メートルくらいである。雪は少ないが冬
は殊に寒く、気温は零下二十度か三十度は常であり、
零下五十度以下になると作業は中止された。

反対に夏は殊の外暑い。特にぶゆが多く出て作業能
率を下げた。

夏至の頃は白夜といつて、太陽は三時間ほど西の山に入るが、一晩中薄明るく、午前二時頃には山から太陽が出て来る。シベリアには春、秋の季節はほとんどなく、夏が終わればすぐ冬だ。五月の終わり頃までは雪があり、六月頃の朝は道の水溜まりは凍っているが昼になると猛暑である。収容所の北側に幅五十メートルくらいの浅い川があったが、飛び石で顔を洗い、朝食の時、昼食分も食べてしまうので、昼食の代わりに飯盒に水を汲んで作業へ行った。冬は川が凍っているので山の雪を飯盒でわかつて昼食にした。

最初の冬は、入ソの際、着用していた軍隊用の夏服で、防寒装備もなく、靴も編上靴（軍隊用の革靴）であったから凍傷患者が多く出た。しかも麻酔薬がないので、凍傷にかかって、骨まで見える手や足の指を切断することが多く、手術も痛そうで見っておられなかった。ノルマも段々多くなり、作業現場も収容所から遠くなっていった。栄養失調になると歩くことが大変である。細い木ぎれにもつまずいて転んでしまうことが多く、作業現場に辿り着くのがひと苦労であった。冬

の寒さは刃物で切られるようで、タオルなどで顔を覆って現場を往復した。そのため、自分の吐いた息で眉やまつげが真っ白くなり、浦島太郎のようであった。敵しい労働を強いられながら、それを補う栄養は極度に乏しく、また粗悪であった。飢えでやせ衰えた体に酷寒、重労働が重なって、ちょっとしたことが死につながり、多くの人が死亡した。当時のソ連の捕虜取扱規則によると、一日に

黒パン 三〇〇グラム 雑穀 三〇〇グラム

野菜 六〇〇グラム 油 五グラム

獣肉 五〇グラム（骨、内臓を含む）

塩 一〇グラム

砂糖 一五グラム（キャラメルの時もあった）

となっていたらしいが、これなら結構な量である。しかし、実際に捕虜の手に渡ったのはけた違いに少なかった。

大方は二〇〇グラムにも足りない黒パンが弁当（実際には朝食に食ってしまった）、朝夕は塩味のカーシヤ（粥）であった。もちろん薄いので箸の必要はな

く、すすただけで十分であった。特に生野菜の量が少なく、春になればアカザやキノコを煮て食べた。

これはソ連の管理者や糧秣受領者がピンはねしたり、地方人に横流しされ、その残りが捕虜の食糧となつたためである。当時こんな川柳が盛んにうたわれた。「末世かな高粱米をはりたおし」。——当然米の方が美味しく、高粱の比ではない。しかし、カーシヤにすると米は三倍くらいにしなければならないが、高粱なら四倍になる。同じ目方なら高粱の方が硬くなるので珍重がられた。「五分確保 水汲み ノルマー一度ふえ」。

——カーシヤは薄くても、一人で飯盒に半分は食べた。これがみんなの願いであった。この願いを満たすために、炊事の水汲みは一日のノルマを一回余分にするとという意。

伐採作業は特にきつかった。私の小隊の検収員は、融通のきかない二十歳くらいの女性であった。午前中は別に用事がないので、山裾で私と雑談したり、小隊の者が交替で昼食のパンを出し合い、そのパンを食べべたり、歯磨粉をおしろいだと言って顔に塗り、内地の

娘さんより美しいとおだてているうちはご機嫌であったが、午後の検査になると極めて嚴格で我々を困らせた。もちろんソ連の女性の全てがこんな人ではない、念のため。

ある日、検査の最後の組が伐採後、枝の後始末がされておらず、雪の中にちらばっていた。いつものごとく「チースト、チースト（掃除、掃除）」と言ってきかない。残っている二人は疲労困憊しており枝の片付けなどできないと思い、「よし俺がやる。お前も見えおれ」と言って二人を帰し、雪の中の枝を片付けたが、どう考えてもやれるものではない。いつの間にか検収員もいなくなっていた。——死のう——後は何も考える余裕がなかった。寒いので今日切った材木に火をつけた。狼は近くで吠えているが、火を見て近寄って来ない。「この火が消えたら俺の命も終わるか……」。こんなことをぼんやりと考えていたときである。肩をたたかれて我にかえった。中隊長以下全員が松明を持って私を迎えに来てくれたのである。宿舎に帰ってから中隊長が、「誰でも死にたいくらいつらい

んだ。だが、命のある限りこの苦しい生活に耐え抜き、一人でも多くの捕虜を日本に送り届けるのが我々の務めだ、お互いに頑張ろう」と言われた。私は感激し、申し訳ないことをしたと思い一晩中泣いた。

昭和二十一年十月頃であつたらうか、コックリさんを使う人が別の棟について話題となつた。何月何日には貨車積みの列車が入る。それも十八トン車が何両、十二トン車が何両と絶対当たるとの評判であつた。そのコックリさんが、今度は十二月二十五日にはダモイ（帰国）だと言つたのでみんな騒ぎ出した。十二月も中旬になると仕事も手がつかない状態だつた。前日の十二月二十四日は特に寒い日で、みんな伐採もせず、山の中腹で焚き火を囲み帰国の話に夢中だつた。突然一人が「ダモイだ」と叫んだ。遠くの山裾を伝令が馬に乗つてソ連の兵舎に入ったのである。同時に大勢の歩哨が日本人の収容所に行き、病人など残留者の装具を点検し出した。みんなは「万歳」と力いっぱい叫んだ。仕事など問題ではなかつた。作業場にも帰るよう指示があり、収容所に帰つて装具の検査を受けた。

本当に嬉しく、みんな有頂天になつて喜んだ。翌日、装具を肩に、山道を蜿蜒とヤプロノワヤに向かつて山を下つた。ヤプロノワヤの部隊も移動の支度をしている。私達の乗る貨車も引き込み線に入り糧秣を積んでいた。絶対ダモイだと信ずると同時に、今までの過酷な労働も、飢えも、寒さも忘れて、心は内地に飛んでいた……。

一週間も待つたが一向に乗車命令はない。いつの間にか貨車も引き込み線からいなくなつていた。仕方なくまたサハリンの山の中へ、重い装具を背負つて四キロの道を逆戻りした。後から聞いた話によると、移動はダモイではなく、炭坑行きとのことだつた。炭坑は食糧事情も悪く、ノルマも多いとのことであつた。クワバラ、クワバラ……。

二カ月に一回くらい、女医さんによる栄養失調の検診が行われた。颯爽と長靴で闊歩する姿は女医さんとは思えないほど勇ましい。聴診器による内臓の検診はまだよいが、栄養失調の検査は尻の肉をつねる（肉の厚さで調べる）だけで決定される。女医さんに点数の

ない者は、なかなか栄養失調になれないといううわさであった。栄養失調になれば一カ月間作業が休める規定なので、みんななりたがった。私も二回なったが、残念なことに休む機会には恵まれなかった。一回目は、休む代わりに炊事係となり水汲みをした。炊事当番は食事が多いので、三週間で六十五キログラムになり、途端に原隊復帰となり作業に回された。二回目は、思想教育の一環であろう、チタ市で集合教育があり、サハリンからも五人が割り当てられ、その一員としてチタ市に派遣された。白樺の皮を燃やしての原始的な生活から明るい電灯の下で、少しは人間らしくなった。しかし教育は重労働であった。

朝八時から六十分授業で十時限。それが終わると二時間の共産党史の映画があった。この一カ月は非常に長く感じた。サハリンに帰ってからは、毎晩、伝達で参ってしまった。飢えと寒さときついノルマ。捕虜の体も段々と枯れていった。

宿舎の中でも黒パンの盗難が多く、炊事の糧秣倉庫からも盗まれた。犯人は寒い冬の宿舎の出入口に縛ら

れ、三日目に死んでいった。炊事の糧秣を盗んだ者は懲罰として営倉（地面を掘った穴で暖房はない）に一夜放置された。「寒い、寒い。許してくれ、出してくれ」と泣き叫びながら翌朝死んでいった。「こんな状態でよいのか、何とかしなければ」という声で「大和（やまと）」という壁新聞が作られた。毎日の生活の心得や漫画、ダモイ物語、歌、意見などいろいろ書かれた。私も互譲礼節、誠実、和等について投稿したところだが、この新聞が反動新聞だと言われ問題になった。私もソ連側の調査に何度か呼び出されたが、別に内容が悪いのではなく「大和（やまと）」という名前が反動的ということでおさまった。

昭和二十二年十月頃、サハリンの抑留者十人に対して往復はがきが渡され、留守宅に通信するように言われた。手紙は検閲が厳しく、自分の働いている内容やソ連のことは一切書けなかった。通信文の内容は次の通り。

拝啓 久し振りのお便りです。御一同様お元氣にお

暮らしの御事と御推察致します。

小生も御蔭様にて元氣旺盛任務に邁進し面接できる日を楽しみに日々を送っています。

御地の状況を新聞で見たり、噂で聞いたりしておりますが私達の想像以上の御事と存じます。皆々様も御身大切に、御一同様よろしく。

敬 具

壁新聞は作る。暖かくなる。作業ノルマのパーセントも上がる。食糧事情も少しはよくなって、生活もおおい安定してきた。その頃からソ連も民主運動を奨励したり、日本人の要求も入れるようになった。余裕が出れば、生活を楽しみたいという欲望もある。

日本人で「演劇団」を作つたらどうかということになった。捕虜の中からも浪花節、講談、漫才、音楽の得意な者も揃った。これ等の者は軽作業に回され、作業中も練習に励んだ。後には演劇団員は交代で作業を休み、練習することも許された。音楽部の活動は大変であった。大工が木をくりぬいてバイオリンの胸部を

作り、弦は自動車の運転手（ソ連人）に頼んで針金（細いもの、太いもの）をもらい低、高音を出した。

弓は櫛作業の者が、馬の尻尾の毛を抜いて作った。全員の苦勞の作であったが音程はどうだったか？ 作詩、作曲者によつて歌もでき、楽団の伴奏で毎晩のように楽しく歌った。

紫に つつじ咲けども 浅みどり 白樺しげれど
故郷（ふるさと）遠く

白雲の はるかに望む思い出ぞ 何れの日にか 帰らん

ソ連人は音楽好きで、毎晩のように聞きに来た。後には、ソ連の歌の楽譜を取り寄せて伴奏したら、歩哨も検取員も大喜びで歌い、踊った。「ヤボンスキー（日本人）、ソ連の歌もわかるか、オーチンハラシヨ（非常によい）」と称賛された。芝居、講談、漫才、浪花節など日曜日毎に行つたが、「父帰る」「蟹工船」など、働く人民の勝利につながるものがよかつた。芸が身を助けるとはこのことか。

辛いなことに私は、最初の頃の五七地区に配属され

たことはなかった。元来、歩哨は捕虜を保護するのが任務である。その歩哨が検収員（作業量の検査をする人）と同調し、作業管理を桶に栄養失調による重症患者、歩行困難な者、回帰熱患者（繰り返して熱の出る病気で、シラミ、南京虫などが病原菌の媒介をする）等病気に苦しむ患者まで作業に追い出すので、歩哨や検収員は蛇蝎だぐの如く忌み嫌われた。病人が作業に出れば、健康な者は病人の面倒を見ながら、病人の分までノルマが要求される。作業中、寒いので焚き火の所に患者を外套にくるんで休ませておき、休憩になって帰って来ると、焚き火の中に倒れて焼け死んでいたり、作業が終われば病人を背負って、やつとの思いで宿舎に辿り着いたら死んでいたという者も少なくなかった。ちなみに、第五大隊一五〇〇人中、約半数の七〇〇人くらいが死亡しているが、この地区での死亡者は四〇〇人に近い。宿舎には廊下まで患者がいる。死者がいる。歩く道もない有様だった。朝の点呼に、週番が寝ている者の頭をたたいて回り、目を開けばよいが、開かない者は死者として裸にして外に運ばれた。山と積

まれた死体は、炊事の水汲みが桶に入れて山に捨て、帰りにはその桶に食事に使う水を汲んで帰って来る有様であった。まるで地獄だ。帰国の希望も空しく死んでいった同胞の怨念が、落ちつくこともできずに漂っている五七地区であった。奇しくも一年後、私たち七〇〇人はこの地区の整理作業に派遣された。すでに前にあった宿舎は焼き払われ、新しい宿舎であったが、検収員は前と同じお婆さんであった。私は作業班長で、前のこともあり心配したが、婆さんは当時のことを思い出してか、ノルマについては厳格でなく大助かりであった。

昭和二十三年三月頃、サハリン、ヤプロノワヤ、その他の地区の作業も残務整理の段階になり、大部分がモグゾン（ヤプロノワヤの西方約五十キロ）に移動することになった。

移動がまた大変であった。最初は客車で行く予定であったが、指揮官が交通費を着服しているので切符がなく、客車に乗ることはできなかった。仕方なしに切符のいらぬ貨車列車で行くことになり、駅に止まっ

ている無蓋車に乗れと言われた。シベリアの三月といえはまだ寒い。これに乗って行ったら途中で凍死することは明らかである。

「降りると殺すぞ」歩哨が無蓋車に乗っている我々に銃を構えている。「仕方がない、殺すわけはないから列車が動くまでは静かに待て。動き出したら飛び降りよ」と言って寒さに震えながら乗っていた。動き出したら飛び下りた。何度繰り返しても駄目だった。指揮官は怒った。「何でもよいから、モグゾンまで行け」ということになった。行くのはよいが、困ったことに字が読めない。モグゾンがどこにあるかわからない。無茶苦茶である。小人数に分かれ、扉のある有蓋車を探して乗った。

それでも寒くて一晩中震えていた。明け方止まった駅がモグゾンであった。先発隊が迎えてくれたので大助かりであった。大急ぎで次から来る者に伝えた。

駅で全員集合し、新しい作業地（駅から四キロくらい入った山の中）へ行ったが、山は原始林で全部伐採を終わるには三年はかかると言われ、みんな嘆いた。

モグゾンでは五小隊に分かれて伐採作業を行った。

みんな頑張ったが検収員が意地悪で、作業量をノルマの三〇パーセントくらいにしか書かなかつた。私達五人の小隊長は、毎晩のようにソ連の大隊長室に呼ばれ、ノルマの督促を受けた。いくら頑張ってもこの検収員ではやりがいが無い。しかし、収容所におけるストライキは、厳しい管理体制で不可能である。各小隊長は決死の覚悟でストライキに入った。翌日から伐採の現場には行くが、焚き火を囲んで仕事はしなかつた。ところが、一番初めに困ったのが検収員であつたから皮肉である。作業終了後、検収員の書いたノルマ票に日本の小隊長が署名し、事務所に届けることになっている。事務所に届いたノルマ票も小隊長の署名がないので通用しない。従つて、検収員は仕事をしていないことになり、食糧の配給が停止される。検収員は困つて、寝ている各小隊長に署名するよう依頼に来たが、個人的には絶対署名しなかつた。遂に五人の小隊長と検収員が山の中で団体交渉することになり、雪中で相対して交渉した。以後、作業量を一〇〇パーセ

ントに書くということと妥結した。その後は日本人も真剣に作業に励んでノルマの完遂に協力した。

五月になって、ソ連の大隊長当番（日本人）が、「変だ、六月からの作業計画がない」と言った。各隊には急にダモイの噂が広がった。まさかとは思ったが、その頃から何回かの装具検査が行われた。いつの検査にも大目に見られていた、針、糸、死亡者の住所氏名の書いてある紙片、遺骨まで全部没収されてしまった。いよいよダモイかな、心ひそかにそんなことを願った。ある日、捕虜は一カ所に集められ、ソ連の大隊長から正式に帰国の伝達があった。広い野原で最後の装具検査があり、駅に向かって歩いた。今までの長かった苦しみも忘れ、みんな心から喜んだ。列車の中でも（もちろん貨車列車）内地の話に花が咲いたが、前にいたヤプロノワヤを通過する時は、全員起立して英霊に決別し、未だ病院に残って懸命に療養に努めている者の健康を祈り黙禱した。帰国者全員汚泥の涙を流し、別れを告げた。途中ハバロフスクでは、日本新聞社のメッセージを受けなければならない。この答辞

の巧拙と民主化の状態によつては、シベリアへの逆戻りもあると言われた。

我々の部隊は、作業中、ロシア語に精通しているソ連の大隊長当番が、上等兵でありながら指揮官になっていたため第一関門は無事に通過した。上級者が指揮官であれば民主的でないと判断されることを考慮したものである。

長い期間、貨車列車に揺られ、やっとナホトカに着いた。そこでは海岸での天幕生活であった。昼は四キロもある遠い山から、石を運んで来て海に捨てるのが仕事であった。夜は遅くまで、幕舎毎に労働歌を競い合つて歌った。いずれも部隊の共産化、民主化の評価の対象となり、良好なものから帰国させられた。とにかく朝から夜まで戦々恐々とし、忙しい毎日であった。共産主義、民主主義が徹底したと評価された部隊、作業能率のよい部隊は、第一、第二、第三分所とスムーズに通過していくが、そうでない部隊は、せっかくここまで来ても、またシベリアへ逆戻りすることも少なくなかった。私達の部隊は作業能率が良いとい

うので無事に通過して第四分所に入った。ここまできればもう大丈夫。逆戻りは絶対にない。日本から来る迎えの船を待つばかりである。ここで今までの上等兵の指揮者は上級者と代わった。飢餓、重労働の悪夢もさめ、楽しく、ゆつたりとした生活であった。

各県の県人会名簿も備えてあり、みんな喜んで署名をした。名簿には、すでに帰った知人も大勢いて驚いた。今日は来るか、明日は来るかと、ただひたすらに帰国船の入港を待ちわびていた。ある日、海の彼方から待望の帰国船が入港した。ナホトカ港で信濃丸に乗船、一段一段とタラップを登る足も軽やかであり、乗り口でソ連兵が乗船者の名簿を先頭の者に渡し、登り終わった所でアメリカ兵に渡した。船上でアメリカ軍の点検を受け終わった時、いよいよ帰国できるのだとみんな抱き合って泣いた。船は静かな日本海を滑るように舞鶴に向かった。

ナホトカを出発した信濃丸は、真っ青の日本海を静かに進み、まるで夢でも見ているような感激の船路であった。「あつ、日本だ」の声にみんな甲板にかけよ

り、遠くにかすんで見える丹後半島の山々を見つめた。みんなの目から涙、涙、涙……。山影もくつきり見えるようになり、船は舞鶴の港内を静かに棧橋に向かった。年老いた者、上級者も下級者も懐かしさに狂喜した。船はドドッとにぶい音を立てて止まり錨が下ろされた。

棧橋から一步一步、しっかり踏みしめながら上陸する。故国の土だ。出迎えてくれた白衣の看護婦さんの姿も、目に痛いほど美しく感じた。上陸後直ちに入浴して衣類の支給を受け、予防接種、DDTの消毒などを終え、二階の大広間の畳の上に寝ころんだ時、「やっと帰国できたんだ」という実感がひしひしと身に感ぜられた。

その日こそ忘れもしない、日本晴れの昭和二十三年六月二十七日であった。